

「出羽島の漁業史記念物」～石積み防波堤～ 徳島県牟岐町

出羽島の漁業は、寛政12年(1800)に、牟岐中村庄屋青木伊助が鞆浦御陣屋に召しだされて、大島と共に、出羽島への移住を督促されたことにより始まる。その後、移住者への、船、漁具等の貸し付けや、税金や諸役出仕の減免等の好条件が提示され、享保3年(1803)には約40軒の漁家が定住、漁村集落が誕生することになる。移住後、明治年間の漁業は、鯛の一本釣を中心に、カツオ、マグロ延縄漁業も行われて、明治の終わり頃には130隻近くの漁船が操業しており、大正・昭和初期の最盛期へと移行する。

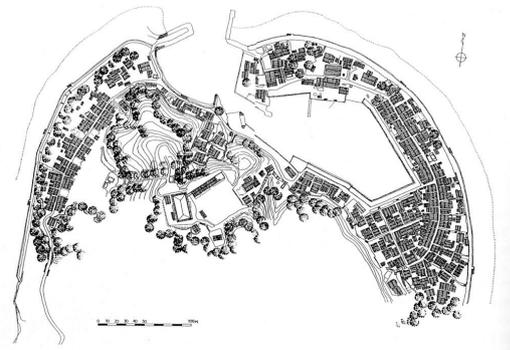


出羽島漁港
(社団法人全国漁港漁場協会HPより)

空豆の形に似た出羽島の北に、自然の砂州が形成されており、この砂州に囲まれた天然の良港は、かつて「大池」と称され、「出羽の港は巾着港」と呼ばれていたという。現在の第1種出羽島漁港の港口の石積みの大波止は、明治4年頃、官費半額と住民の負担半額をもって築造したものであり、現在も漁港の最も重要な防波堤としての役割を果たしていると同時に、歴史的・景観的にも重要な建造物として評価されている。また、新町に沿った防波堤は、延長三町(540 m)、敷四間(7.2 m)の規模で、石樹竹により根固めされており、これも明治初年に築造したものと推定されている。その後、昭和10年から県費補助を得て、浚渫工事が進められ、昭和27年に第1種漁港に指定されると同時に、国の漁港整備長期計画に基づき整備が進められ、徐々に現在の姿になっている。

和10年から県費補助を得て、浚渫工事が進められ、昭和27年に第1種漁港に指定されると同時に、国の漁港整備長期計画に基づき整備が進められ、徐々に現在の姿になっている。

【参考資料】牟岐町史



自然の地形に抱かれた徳島県牟岐町出羽島漁港と町並
(阿波のまちなみ研究会「漁村集落の〈景〉調査報告書」(平成7年))

みどころ



- 大池のシラタマモ：1億4千万年前に繁殖した植物で世界では4箇所、日本ではこの出羽島の大池にしか生育していない。生物が海から陸へ移行し進化する途上の形質としてきわめて貴重な学術資源といわれている。1972年に国の天然記念物に指定された。